

金谷 優（2019年度日本英語学会賞（著書）受賞）

この度は、拙著 *Causation and Reasoning Constructions* (John Benjamins, 2019) に対して、「日本英語学会賞（著書）」をいただき、大変光栄に存じます。本書の準備段階、執筆段階でお世話になった先生方、また、貴重なお時間を割いて審査に当たってくださった英語学会賞の選考委員の先生方、学会事務局の先生方にお礼申し上げます。

本書は、*Constructional Approaches to Language* というシリーズの一巻として出版されましたが、企画を持ち込んでから完成にいたるまでに、非常に長い時間を要してしまいました。この長い期間を通して、内容からスタイルにいたるまで非常に詳細かつ建設的なご意見を何度もいただき、また査読者との調整を綿密に行っていたいただいたシリーズエディターの小原京子先生（慶應義塾大学）と Jan-Ola Östaman 先生（元ヘルシンキ大学）に、特に感謝申し上げます。お二人の文字通り献身的なご協力なくして本書は完成しえなかつたらうと思います。

本書を執筆している間、言語学のやり方そのものも大きく変わったところがあり、その一つにデータの取り方があります。大規模コーパスを使い、統計的にデータ処理をするという手法が広く用いられるようになりましたが、この本では、そのような方法は使っていません。主に正文・非文データを出して、いちいちその文法性を説明していくという「古典的な手法」で議論を展開しています。確かに、これは古典的ではありますが、同時に、普遍的な手法でもあります。このようなやり方のルーツをたどれば、筑波大学大学院入学以来、中右実先生よりご指導いただいた「徹底した証拠主義」と廣瀬幸生先生よりご指導いただいた「持ち家主義」という研究姿勢に行きつきます。つまり、複数の証拠を挙げて一つのことを徹底的に議論し、その上に自分なりの言語学を築いていくというやりかたです。海外の出版社から新たな本を出す上で、国際的なトレンドへ対応していく必要性を感じたり、途中で「このやり方でいいのだろうか」と悩んだりもしましたが、やはり根底には、院生時代から染み付いたこのやり方でしか納得のゆく議論ができないという意識があり、文法性の説明に基づく記述を充実させることに力を注ぎました。このようなしっかりとした基盤を院生時代に築くことができたのは大変幸運なことです。中右先生、廣瀬先生をはじめ、院生当時ご指導いただいた先生方や先輩にも感謝を述べたいと思います。

以前、同じ筑波大学の先輩である岩田彩志さんが安井稔先生のお言葉を引用されて「日本人の英語学研究とは、英語を良く理解することにつながるような研究でなければならない」とおっしゃっていました。少しは我々日本人が英語という言語（のごく一部の言語現象）をよりよく理解することへ貢献できたのではないかと思います。これからもこのような形で地道な英語学研究続けていきたいと思ひます。